
彼女（の記憶）に恋をする

寝猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女（の記憶）に恋をする

【Nコード】

N2871F

【作者名】

寝猿

【あらすじ】

二年間付き合った彼女に別れを告げた「俺」。理由はなぜか残った前世の記憶。その記憶の中で、「俺」は運命の女性と出会い、お互いに恋をした。「俺」は苦悩する。前世を超える相手を探さないといけないのか？それともやはり前世の相手こそ現世の「俺」の最愛の人なのだろうか？

第一話「プロローグ」

「えっ、ちょっとそれどういう意味？」

高校三年の夏、部活が終わった者から強制参加となる補習授業の帰り道。元気すぎる太陽、元気すぎる蝉。強烈な日差しを熱烈歓迎するかのように手を伸ばしている木々の下、木漏れ日が静かに揺れる木陰の中で、俺は二年付き合った彼女に別れを告げた。それも（彼女にしてみれば）突然。

彼女は始め俺の言った言葉がうまく飲み込めていないような、聞きなれない外国語を聞いたみたいに困惑した顔をしていた。そして次第に、ようやく事の重大さに気付いたように険しい顔に変わっていった。彼女のそんなに歪んだ顔はこれまで見たことがなくて、俺は前言撤回しそうになった口の中に都合のいい言葉を押し留めた。

「もう、決めたことだから」

「何で、何でなの？ 私たち、自惚れじゃなくうまくいってると思ってた…こんなの、辛すぎる」

そう、俺と彼女はうまくいってた。すこぶるうまくいってた。自惚れじゃなく、俺もそう思う。だから俺もすごく辛い。気持ち折れそうほど辛い。彼女のくしゃくしゃに歪んだ顔（今ではもう堪えきれず、静かに泣き出している）を見ると、俺はとんでもない小学生レベルの計算間違いを犯していて、誰かが横からこそっと指摘してくれたら「ああ、なんだ！ まーちがえちゃった」と納得して間違いを正すんじゃないかと思うくらいだ。

でも俺はぐらっぐらに揺らいだ決心をかるうじてまっすぐに立て直した。いや、まだかなり不安定にナナメってるんだけど…とにかく心を鬼にして言った。

「他に気になる奴がいるんだ」

しかしトドメを刺したはずの俺の言葉に、彼女は思いの外動揺しなかった。

「誰よそれ、美穂？聖子？紀江？」

俺は愕然とした。美穂は中学からの友達で、一回だけ二人きりでカラオケに行ったし、聖子には二年のときに告白された。紀江に至っては部屋まで行った（もちろん何もしていない、神に誓って）。どれも男友達にすら言っていないトップシークレットで、当然彼女には言っていない。言えるはずがない。こうした事実を知ってか知らずか、彼女は三人の名前を口にしたのだ。ってことは確実に後者じゃないか。俺は別れ話を切り出しておきながら窮地に立たされた断っておくけど、俺はそんな遊び人じゃないし、浮いた話といえば上記の三件くらいなものだ。それをピンポイントで把握しているなんて、そしてそれを知りながら、俺についてきてくれていたなんて…。

「違うよ、あいつらじゃない」俺はだんだん悲しくなってきた。

「でも相手が誰なのかは言えない」

俺だって誰だか知らないんだから　とは言えなかった。言う必要もなかった。彼女は俺の言葉を最後まで聞かないうちに、木陰から飛び出して眩しい太陽の光の中へと走り去っていったのだ。雨が降っていたならドラマのワンシーンにも見えただろう、しかし残念ながら陽はさんと照っていて、立っているだけで背中も額も手も汗でぐしょぐしょだった。うだるような暑さ、という表現が最もしっくりくる、絵に描いたような夏休みのある日、俺は二年間に及ぶ初恋に終止符を打った。

言えるわけがない、言えるわけ…。

「俺には前世の記憶があって、前世で好きだった女性をこの現世でも探し続けている、なんて…」

俺は滞留する蒸し暑い空気の中で、まるで深海に佇む魚のように立ち尽くしていた。

第二話「オレックスと声のでかいベースリスト」

「よおオレックス、相変わらずの重役出勤だな」

この声がやたらでかくて甚だベースリストとは言い難いこの男は、教室中に響いたんじゃないかと思うくらい大声で言った。

「お前こそ相変わらず態度も声もでかいな。ていうかそのオレックスってのやめろよ。」

オレックスというのはこのやたら声のでかいベースリストが俺につけたあだ名だ。自分の事をオレオレ言うからっていう理由らしい。そんな奴は俺の知る限り山ほどいるし、かくいう命名者だつて自分の事をオレと言っている始末。あげく呼ばれるほうがこっ恥^ばずかしいくらいセンスまで悪い。

「いいじゃねえかオレックスで。もうサークルでも定着しちまつたしな。にしても一限から出ると腹減るなー!!」

話題がウサギみたいにすばしっこく、ぴょんぴょん跳ねて捉えどころがないのがこいつの話の癖だ。そのくせ皮肉屋で声までかい。

「ベースリストってのはもっとクールで物静かなもんだぜ」オレックスのささやかな抵抗。

「古くさい考え方だな。それも前世の記憶つてやつか？」

俺はかなりドキツとした。なんなら心臓が喉仏の辺りまで出かかったのを神に誓ってもいい。こいつは口が堅いし、俺の真剣な悩みを笑いもせず自分のことのように聞いてくれると信じていた。事実俺の非現実的な悩みを自分の事のように考えてくれたりと、十分すぎるほど俺の信用に応えてくれた。しかしいかんせん、声がかすぎた。俺の超ナーバスな問題を決して他言しなかったとしても、この男にかかれば一瞬のうちに全世界に向けてアナウンスしてしまいそうだ。俺はヒヤツとしながら周りを見渡したが、幸い誰も俺たちの下らない話は聞いていないようだった。

ベースストこと大神博哉は、同じ軽音サークルに所属しているバンドメンバーの一人だ。おおがみひろや

俺は俺の前世にまつわる記憶を誰にも話さずに十九になった。それはそうだ、「俺には前世の記憶があります。前世で恋をした女性と再び会う約束をしました」なんて他人に言えるはずがない。仮に他人に話そうとしたって、当の俺が話しながら途中で吹き出しちゃうかもしれない。そして勢いで「なんちゃって」「なんて古臭いジヨークで場を南極よりガチガチに凍りつかせたかもしれない。それならいっそ言わないほうがマシ、というのが俺が出した結論だ。そしてその結論を、神父が大事そうに胸に抱える聖書のように、がちりと自分の中に守り続けてきたのだ。大学一年の雪解けの季節まで。

しかし他の多くの問題と同様に、俺のこの不幸を人に話さず自分だけで抱え込むのは、俺にとってかなり荷が重かった。俺はこの前世の誓いをただの記憶に留めておき、新たに恋をするということに強い抵抗を感じていたからだ。異性を好きになる気持ちは人並みにある。恋くらいは（一方通行が主だが）幾度となく経験してきた。しかし付き合うとなると、とたんに前世の記憶が蘇る。「来世でもきつとまた会おうね」という彼女の声が俺の右の鼓膜と左の鼓膜の間を行ったり来たりする。そして一度も会ったことのない女性に対しての罪悪感が、風船を割るように急速に恋愛感情を収縮させる。これが俺の恋愛のパターンだった。

過去に対してクールな男だったらもつと楽だっただろうな、と俺は何度思ったことだろう。なにせ高校時代に付き合っていた彼女にだって、未だにひとしきり懐かしさや後悔に似た想いすら抱いているのだから。

まあとにかくこの不真面目そうに見えてけっこう目の前の問題から目をそらせない性格のせいで、俺は信用できるバンドメンバー四

人に、初めて俺の悩みを打ち明けた。その中の一人がベーシスト・大神博哉だったわけだ。

あれはとあるライブの打ち上げの二次会の後の三次会兼反省会だったか。そのころには四人ともライブの熱も冷めて反省点なんてすっかり吹き飛び、代わりにアルコールの熱が体中を駆け巡っていた（あえて特記することではないかもしれないが、一浪の博哉以外はみんな未成年だった）。音楽の話がようやく尽きかけたころ 正確には尽きてなどいないがみんな飽きてしまっていたんだが 二度三度の変遷を経て話題は四人の恋愛へとようやく辿り着いた。

* バンドメンバー *

山下徹（やましたいさるVo & たまにG & つねに不思議）

大神博哉（Ba 普段特大Vo）

稲森美里（いなもりみさとKey & Dr & バンドの紅一点）

オレックス（G：ステータス・前世ののろい）

第三話「オレックスはかく語りき（前編）」

深夜というか朝方というか、それくらい微妙でナチュラルハイな時間、博哉のワンルームに四人の廃人が集って飲み耽っていた。博哉の好きなColdplayが流れていたが、それは場の雰囲気にも最も相応しくないCDの一つだった。名作であることは他の誰もが認めていることではあったんだけど。酒のペースは落ちていたが、会話はその勢いを保ったまま、行ったり来たりフラフラしながら何とか恋愛という壮大で野心あふれるテーマに辿り着いた。

「そーいやあマヤピーはこないだライブに来てたあの娘、どうなったの」美里の質問がいきなり大人しい山下に襲いかかった。ヤマピーだとジャニーズとかぶるからマヤピーなんだとか。結局この名前もいつの間にやら定着してしまったな。初めは恥ずかしくてとても呼べたもんじゃなかったのに。

「えーと、誰だっけ」わざとらしくそう言うと、ぬるくなった誰かの缶ビールをぐくぐと飲んだ。山下の缶の下には今日（というか昨日）のライブのセトリリストが置かれ、始めは真面目に反省会をしようという意気込みが顔を覗かせたのだが、菓子の油と飲み物の露にまみれたそれは、僕意気込みを削ぐことに成功していた。もう何をどういう順番で演ったか、全く思い出せない。

ここのところ山下の恋人は一ヶ月に一人のペースで入れ代わっているらしい。俺たちはサークル内のバンドの中ではかなり仲のいいほうだったが、プライベートはなぜか踏み込めないままに一年が経過した。なので本当に山下の恋愛事情がどうなっちゃんのか、こういう機会じゃないとなんとなく聞けないのだ。意外にバンド外の人間のほうが詳しくかったりするもので、サークルの誰かは山下の恋愛事情を揶揄して彼を「マンスリー」と影で呼んでいた。軽音のしかもサークルなんて、ほんとどうしようもない奴ばかりだった。俺たち

のバンドを除いては。そしてとにかくあだ名をつけるのが大好きな集まりなんだ、それについては俺たちのバンドも例外ではなかった。

「ほら、あの可愛い子だよ。片側に髪を結んで、色白で」

山下が忘れたはずはなかったが、その話題はどうやらまだタブーだったようだ。明らかにこれ以上話を広げるなオーラを放っている。ふられたんだ、とは誰もが気付きながら口に出さない。声のでかい博哉もにやにやと含み笑いをするだけだ。まったく、何だって山下みたいなもの静かなヴォーカルがモテるっていうんだ？ ステージであんなボソボソしたMCするヴォーカルはこいつ以外に見たことがない。そのくせ歌い始めると声にやたら存在感があるんだよな。リズム感も音感もソコソコなのに。ま、それこそヴォーカリストに最も必要な要素だとメンバーの誰もが思っているわけだが。そんな不思議な性格なのになぜか人に嫌われたりすることがない、どこか不思議な奴なんだよ、この山下ってのは。

「オレックスはどうなの、彼女いないっていつてたけど」

山下が話の矛先を俺に向けてきた。「そうだな、フリーだとは聞いていたけど、過去には色々あったんだろ？」 博哉がニヤニヤしながらその話に乗った。俺に対するときの声は相変わらずでかい。この二人が続けて話すと、まるで音のレベルが全然違う二曲を続けて聞かされている気分になる。A型の俺としては気になって仕方ない。

「今はいねえよ。高校時代は二年くらい付き合ってた彼女がいたけどな」

「何で別れちゃったのよぉーそんな長かったのに」 間髪いれずに美里が切り返す。しかも酔ってるくせに鋭い。彼女がいないことは前から言っていたが、これは過去について語らねばならん空気じゃないか。

俺は少しだけ迷った、が話す事に決めた。俺は仮に俺の不幸な身

の上を語るとしたら、こういうシュチエーションに限る、という三カ条を設定していた。まず話す相手が信頼できる奴であること、深夜のナチュラルハイなテンションであること、だらだらと深酒をして意識の奥のほうが微かにまどろんだ状態であること、この三つだ。まさに今このシュチエーションが、俺の設定した高い三台のハードルをあっさりと飛び越えた。俺は話すしかない、と思った。こういうところが無駄に几帳面なんだ。

「俺はさ、前世の記憶があるんだ」さすがにメンバーの手が止まり、視線が集まった。ここで笑い出したりする奴が一人でもいたら、俺はそれを気の利いた冗談に話をすり替え（当然そんなものはこの時点で思いついているはずがない）、それからは仮面でもかぶりながらバンド活動が続けるか（そういうバンドは実在するのでパクリなんだけど）、脱退するかしていたと思う。しかし幸せなことに、こいつらは真剣に俺の話を聞いている目をしていた。同時に俺は冗談で済まされる一線を越え、後には引き返せないことを悟った。喉が渴いたのでそこにあった焼酎を口に含む。やはりこれを話すには適度なアルコールが必要で、ヤブ医者でもそう言っただろう。

俺は続けた。前世で恋人関係だった女性と来世の契りを交わしたことを覚えていること。そしてそれが邪魔して他の女性に対して臆病になり、うまく付き合えないことを。

「高校時代の彼女と二年も付き合ったのは……賑やかだった空気は少し緊迫感を含んでいたが、それは心地いい程度のもだった。三人の好意の方が緊張感をはるかに上回っていたからだ。

「その娘と付き合っていくうちに、前世の記憶なんて忘れられると思っていたんだ。なにせ俺はその娘が始めての彼女だったから。罪悪感を感じながらも、脳裏に居座る不思議な記憶は、いつかフェードアウトしていく音楽のように消えていくんだと思っていた。でも現実とはそれと全く違った。その娘と付き合う期間が長くなればなるほど、俺の予感が全くの間違いだったって事が確信へと変わって

いった。前世の記憶は付き合う期間に比例してどんどん大きくなり、俺はそれを抑えられなくなった」

ColdplayのCDはいつの間にかその回転を止め、ONKYOのステレオまで俺の話に釘付けになっているようだった。机の上に転がっているボールペンも、食い散らかされたスナックも、クローゼットの奥に潜む博哉のジャケットやら下着やらまでもが、僕の悩みについて関心を抱いているようだった。

この分じゃ明日の朝刊は俺の記者会見がトップじゃないか、という軽はずみな冗談は喉の奥に閉まり、俺は小さく頷いた。何に頷いたのかはよく分からなかったけれど。そしてこの話題は質疑応答へと移っていった。

第三話「オレックスはかく語りき（前編）」（後書き）

後編に続きます、たぶん。

第四話「オレックスはかく語りき（中編）」

「その記憶つてのはさ、どんな種類のものなんだ？」博哉がぽっかり空きそうになった間を取り繕うように切り出した。山下はすぐ後ろにあるステレオの再生ボタンを押した。Coldplayの音楽はさつきよりもこの場に相応しくなったみたいだ。

「例えば、彼女の顔は分かるの？行きた時代とかは？周りの景色、場所、何がオレックスの脳裏に残されているのかな」博哉の漠然とした質問が美里によって色付けされて具体的な形を得た。バンドの役割と同じだな、こういうところは。

「時代とか景色つてのは全く思い出せない。いや、多分それは覚えてないんだ、物理的に。それだけじゃない、俺がどんな名前で、彼女を何て呼んだのか：それすら分からない。俺が覚えているのは彼女の顔、彼女の仕草に彼女の声：背景のない記憶の中で声が聞こえて、俺達は約束するんだ、来世でもまた会おう。そして二人で幸せになるうつて」俺は何を喋ってんだ？という気分になった。これほど深刻に俺を悩ませた話題なのに、口に出すとこれほど陳腐なものなのかとつくづく実感したからだ。

でも俺が覚えているのはこんな表面的な記憶としての過去ではない。断じてない。それは脳が持っている情報なんていうレベルの記憶ではなく、遺伝子に刻まれている情報であり、細胞が全精力を傾けてインプットした記憶なんだ。

目を閉じれば彼女の顔が脳裏に描かれ、時間とともに鮮明さを取り戻す。傍にいた彼女の香りが漂い、左手には彼女の右手の温もりが蘇る。母親のように強く、赤子のように柔らかく優しい手は、小

さな鼓動を絶え間なく伝えている。その鼓動はリズムカルに俺を呼び、彼女の言葉にならない想いを運び続けている。やがて声が聞こえる、透き通ってそのまま風になってしまいそうな、しかし芯のある声

しかしこの記憶を、言葉だけで三人に伝えるのは不可能だった。彼らは俺の途切れ途切れの言葉の断片を一つ残らずかき集め、ゆっくりと咀嚼するように注意深く聞き入っていたが、それでもまだ足りない。それは単に俺のせいだ。この美しく悲しい呪いは重く俺の人生にのしかかっているというのに、確かにそこにあつて俺の一部となつているのに、俺ときたらほとんど何も分かつてなくて、語るべき言葉も持ち合わせていないのだ。

「オレックスはどうしたいんだ、忘れたいのか？それとも記憶の女性を求め続けるのか？」

珍しく山下が自ら口を開いた。

何か話そうとして俺は口を半分空けたところで、声はとうとう空気を伝わる振動になり損ない、息だけが静かに吐き出された。そこなんだ、俺がちょうどファイフティーファイフティーの所で進むことも退くこともできず立ち止まっているのは。

「私の今のカレはね…、高校三年から付き合ってる彼氏がいるのは言つたっけ」

確かそんな話もあったな、という風に三人はうなずいた。

「カレはね、他の女の子と私を比べるのが好きなの。私が言うのも変だけど、高校時代からけっこうモテたのよね、カレ。私が知る限りでも高校二年までに七人くらいの女の子と付き合ってたのよ。私は統計的に分析したことないけど、全国平均と比べてもなかなかのスコアでしょ？」なかなかなんてもんか、俺は一生かかってもその平均を超えられそうもない。俺の苦い顔を山下が気付いてくすつと笑った。

「カレは今でもそこそこモテるんだけど、私に対してはちゃんと

一途なの。自惚れっと思うかも知れないけど、程度の差こそあれ、女の子は冷静になればちゃんとそのテのことは分かるのよ。特に私は鋭いみたいだけどね」知ってるでしょ、という感じで美里は三人に笑いかけた。男三人にはちゃんと心当たりがあった。美里はサークル内の誰が誰を好きだとか嫌いだとか、そういう勘みたいなのが人並み外れて鋭いんだ。

「それなら幸せでいいじゃないか、なあオレックス」博哉は俺の方を向いてニヤッと笑った。頷く間もないままそれを美里が遮る。

「でもカレの問題は別のところにちゃんとあるの。カレはね、ここにあることに過去の女性と私を比べるのよ。携帯電話のパンフレットに載ってる仕様の比較表みたいに細かくね。それも頭の中で完結してるなら害はそれほどないんだけど、カレはふと口に出すのよね。悪気はないんだけど、そういうのってはっきり言ってかなりムカつくわよ。まるで昆虫採集みたいに、女の子を隅々まで見比べてるのよ。服装とか癖とか体のこととかね」

「まあそうかも知れないな、男って生き物は」訳知り顔で博哉が言う。俺は言うに及ばず、山下も同感のようだ。

「女の子はそんなこと望んでなんかいないの。陳列されて観賞してもらったってこれっぽっちも嬉しくなんかいないの。当たり前でしょ？私はい。私たちが望んでいるのは、カレの過去の女性や周りに群がる女性や、そういうつまらないもの全てを頭から追い払って、目の前にいる私だけを強く抱き締めてくれることなの。相対的な場所から一人だけ取り出して、絶対的な場所にひょこっと置いてくれればそれで満足なのよ。だからあなたたちは唯一、世界で唯一それを与えることができる女性を探し出さなければいけない」

俺たちは何も言い返せない。

「私が言いたいのはね、もしあなたがある女性に対して絶対的な感情を抱き、その女性の唯一望むものを与えられるのなら、その力是一滴の喪失もなく彼女に与えなくてはいけないうこと。その雫を他の女性に与えたり、忘れるために他の女性を利用するなんての

は論外だわ。私が与えられるアドバイスはそういうこと」

いくぶん青臭いにせよ彼女の考え方が至極まっとうな人間の恋愛観なんだろう。

でも 俺は続かないその言葉を探した。目には見えない、俺とステレオの間の空間に散らばってしまった言葉を。くだらないことには口が回るのに、俺ときたら肝心なときに何も言葉に出来ない。頭は表現したい感情をこんなに豊富に持ち合わせているのに。

そんな俺の想いを、博哉が代弁するように口を開いた。声はいつもと違って押し殺すように小さく、拳より小さな俺達の心臓を揺さぶるように強く。

第四話「オレックスはかく語りき（中編）」（後書き）

オレックス、あんまり喋ってないです。すみません。

第五話「オレックスはかく語りき（後編）」

「俺はお前の言ってることすげえわかる。お前がマトモな女で正しい恋愛感を持つてるんだってな」

遠くからスーパーカーブの切ないエンジン音が一定のリズムで近付いてくる。新しい一日の営みがゆっくりとうねりを上げて始まっている。空は俺が最も切なく感じる藍色に染まっていた。朝の訪れとは思えないくらい不吉な色だ。俺はこの色を見ていると試験勉強中だろうが深酒の途中だろうが突然やるせなくなり、何もかも放り出して越前海岸まで旅に出たくなる。別に越前海岸じゃなくてもいいんだけど、日本海じゃなきゃだめなんだ、何となく。

でもこの日に限っていえば、俺は何も投げ出せない状況にいた。俺の投げかけた問題が波紋を呼んでこんな状況になっているのだ。

「女ってそうなんだよ、こと恋愛に関しては特にな。俺たちが色々理屈つけてこねくり回してようやく編み出した言い訳みたいなものを、簡単にひっくり返しちゃうんだ。俺たちは迷子みたいに、曲がり角で間違いを積み重ね、気付けば全くとって望んでいない場所に辿り着いちゃったりして、凹んで、でもまた歩き出さなきゃいけない。でも女の発想って、俺たちなんかよりすげえ自由なんだ。翼を持つてるみたいに、行きたい場所にスイスイ飛んでっちゃう。間違えたりとか無いんだ、だって目的地まで一直線だからな。だから俺たち男が間違いだらけで面倒な人種だっと思ってっちゃうんだよね。まるで俺たちの苦労なんて分かっちゃいない。俺たちの意識がどれだけ不自由なものかってな」

そこでふと俺を見た。俺はびっくりして視線を避けた。その先で山下は場違いなでかいあくびをしている。

「俺たちはその埋まりそうにもない意識の溝を、じりじりと詰め寄るように埋めてかなきゃいけない。理解なんてできっこない、脳を共有でもない限りな。でも異なる二つの意思がわずかに触れ合ったとき、俺たちは最高の音を奏でることができるんじゃないか。そういう経験はそうそうないからわかんねえけど、微かに心と心が通じ合った瞬間があるから、人は人間として社会の中で生きていくことが出来るんだろう。音が出る瞬間って、何かと何かに触れ合わなきゃだめだよな？ギターとピック、ドラムとスティック、声帯だってそう。何言ってるかわけわっかんなくなってきたけど、とにかくそういうことなんだよ」

博哉は途中で投げ出したみたいに話を終えたが、俺たちには当然その気持ちがよく分かった。

「わかるよ、なんとなくね。男ってダメだもん」美里が笑う。

「でもよ、その溝って何も男女の仲に限ったもんじゃないぜ。人と人なら誰にでもあることだ。お前だけが特別なんじゃない、皆それぞれ、俺も美里も山下も、間違えを重ねながら一步一步何かに近付いてんだ。前世の記憶があるなんて大げさなこと言っちゃって、多量人と比べて変な奴ってだけで、直面している問題は皆同じなんだよ。迷うことも間違えることもやらなきゃいけないことも、全部同じだ」

俺は やらなきゃいけないことはこんなにはつきりしているじゃないか。それなのに、ずいぶん長い間同じところに立ち止まっちゃったんだな。何てこった、呪いだなんて仰々しい言葉を使って自分に言い訳してただけじゃないか、俺は。

俺は彼女を見つけ出す。これが過去である以上、前世だろうが現世だろうが忘れられないことには変わらない。俺は見極めなきゃいけない、その記憶に残る熱の正体を。

朝は確実に外の景色を鮮やかに照らし出し、薄いカーテンの向こうには活力に満ちた新たな一日が広がっていた。俺はそんな新しい生命の向こう側にいて、一人昨日という時間の中に佇んでいた。いつももなく、他の三人も次の一日を迎えるための準備に入ってしまった。俺だけが取り残されたように一人眠れないままだったが、確かな手ごたえみたいなものが、そこには確かに在った。

それが実体を伴って俺に襲い掛かるなんて、そのときは予想もしていなかった。

第六話「不自由なバンド、自由な女」

その日はまったく何をやっても上手くいかない、そんな日だった。俺が俺の深刻な悩みをカミングアウトしてからかれこれ二ヶ月。深い話をしたことでバンドとしての一体感も今までにない水準に達していたが、いかんせん俺たちのバンドはオリジナルに弱かった。

軽音サークルという、大学生活にありがちな曖昧さを例外なく含んだこの組織において、およそバンドマンが持っているポリシーみたいなものはさほど強くなかった。オリジナル曲へのこだわりみたいなものもその一つだ。軽音部なんかでは、コピーなんて邪道でライブで演るなんて論外、練習だって遊び以外じゃやらないってのが彼らのローカルルールで決まっていた。そのくせ気の利いた洋楽のカバーなんか演ると（ビートルズなんかが多かった）、結構ウケたりするんだよな。まあとにかくサークルってのはそういうしがらみみたいなのがあまなくて、とりあえず和気藹々と音楽してればコピーだろうがオリジナルだろうが関係なし！みたいな気楽なところだった。その風潮は俺たちにとって居心地がよく、心行くまでそれぞれメンバーの好きな音楽を演り続けることが出来た。そして俺たちのバンドはコピーがこれ以上ないくらい上手かった。原曲を忠実に再現しながら、自分たちのバンドの「音」を確実に表現した。テクニクや何かは他に秀でたバンドがいくらかでもあったが、独自色をこれほど出せるコピーバンドは他になかったと自負している。

その日、俺たちはオリジナルに挑戦していた。今まで何度も失敗してきたが、案の定というべきか、やはりその日も上手くいかなかった。美里が土台となるメロディーとコードを持ち込み、肉付けする形で曲作りをするのが俺たちのやり方だったが、肉をつけていくとそれはだいたい陳腐でつまらない曲へと変わっていった。自分で

言うのもなんだが、聞いててこんなにめげる曲っていうのもなかなか狙って出来たもんじゃない。演奏するほうはなおさらめげ、それ以上に落胆した。

「まあ学園祭まではまだ時間もあるさ」

山下がお慰めの楽観論を振りまいた。こいつの独特な声もオリジナルになるとそこらの安っぽいアイドルが歌う声になった。しかもリズム感が無いときたもんだ。

「でもねえ、現実的に考えて今月中には二曲仕上げておかないととてもじゃないけど十月に人前で披露できるレベルには達しないわよ。ちよつと考えさせて、今から作り直すから」

美里の持ち込む曲は、そのままピアノ・ソロにしちやえばミリオン狙えるんじゃないかってくらい土台として素晴らしいものだ。美里はもともピアノを幼少から習っていて、音楽の知識に関していえばバンド内だけでなくサークル内でも彼女の右に出るものはいなかった。プレイヤーとしても申し分なく、何よりグループを生み出す力に長けていた。時々彼女が叩くドラムは（いささか迫力には欠けるものの）リズムを超えて踊りだすくらいに曲に躍動感を与え、溢れ出す生命力が漲るのが聞いている者にも演っている者にも感じられるほどだった。

そんな美里が作ってきた曲を、俺たちはこねくり回して何十と駄作に作り変えていった。もちろんその作業には彼女も寄与していたわけだけど。まさにこの日もそんな一日だったわけだ。俺たちの創作活動はそのまま破壊活動に変わって、ジオラマを跡形も無く踏み潰していくゴジラのようなだった（ちなみにバンド名はそこからとって「ゴジラ」になった）。

こうなると俺たちは集中力を失い、得意とするコピーに走り始める。まず山下が下手糞なギターでU2のRock 'N' Roll Starを弾き始めた。俺も間髪いれずリードギターを入れる。リズ

△隊がすんなりと参戦し、違和感無くイントロを仕上げる。山下の歌が始まるころには、オリジナルで溜まった鬱憤はどこかに吹っ飛んでいた。HIVESのDie, Alrightが続き（これは博哉の大好きな曲だ）、ブランキージェットシティの赤いタンバリン（俺セレクト）、TRAVISのDriftwoodで落ち着きを取り戻し、HYのAM11:00（美里のリスpekt、彼女は歌も上手いんだ）でようやく休憩が入った。もしかしたらこの脈絡の無い曲の無作為メドレーが俺たちの脈絡の無いオリジナルに繋がっているのかもしれない。しかし俺たちの好みは全然違った、これはもう笑っしかないくらい。

その後もオリジナルには全く見向きもせず、自分たちの気に入った曲をひたすらコピーし続けていた。気楽に一年やっただけあつて、コピーのレパトリーは五十曲に達していた。多分この日のうちにレパトリーの半分くらい演ったんだと思う。スタジオを出るころには辺りはもう真っ暗で、七月というのに場違いな冷たい風が俺たちに吹き付けていた。しがらみから開放されて心地よい汗をかいただけには最高のクールダウンだったが、冷静になった頭は俺たちの気分を少しだけ暗くした。オリジナルについては全く進展なしなんだから、まあ当然か。

「じゃあ次は明後日の三時からだな、遅れるなよ」博哉は最も遅刻癖のある自分をネタにしてわざと明るく言い放ち、軽く右手を上げてバイクで帰ってしまった。リズムカルなエンジン音が夜の閑静な住宅街に響き渡り、テールランプの跡が美しい曲線を描いてカーブを曲がって消えた。俺は美里と山下を親父から借りたウイングロードに乗せ、山下を最寄の駅で降ろした。美里の家は俺の帰り道にあったので、練習の後はいよいよ俺が送っていた。

俺も美里も口数は少なくない、いや他人と比べたら明らかに多い。

美里風に言うなら”全国平均と比べてもなかなかのスコア”ということになるだろう。いつもなら音楽の話から恋愛の話まで、盛り上がるتماでは言わないが、絶え間なく自然と会話が続いたものだ。しかしこの日はこれでもかかってくらい会話が続かなかった。自分が持ち込んだオリジナルが形にならなかったショックだろうか、と俺は見当をつけた。よくよく考えればそんなのはいつもの事だったのだが。さて、美里の家まであと十分ほど、どうこの場を乗り切ろうか、そんなぎこちない考えを抱いたところに、ふと美里が口を開いた。

「オレックスはさあ、前世の彼女に会いたい？」

俺はその質問の意図がよく分からなかった。突然すぎたのもあるだろう。別のことで頭がいっぱいだったということはもつとあるだろう。俺はこの後物事がよりはつきりするまで、美里のこの質問の真意が分からないまま過ごすことになる。

「そりゃあね、会ってみないと分かんないこともたくさんあるだろうし。何、心当たりがあるの？」重苦しい空気が重苦しい答えをさせたのだ、俺のせいじゃない。

「んーそういうわけじゃないんだけど、真剣に探す気があるなら手伝ってやつてもいいかな、って」彼女の言葉にはどこことなく棘があった。どこにあるのかはやっぱり気付かないままだ。

「手伝うって、いるかいけないかも分からない人をどうやって探すんだよ？」

「いいから、やる気あるのかないのかハッキリしなさいよ。だいたいあれだけ悩んでおきながら自然発生的な出会いに全てを賭けるつもり？言っとくけどそんなに甘くないわよ、オレックスに限らず理想の相手に会うつてのはね」

美里の口調にさすがのオレックスも力チンとくるものがあつた。でも美里のこんな強い口調は初めてだったし、俺は完全に勢いで負けていた。美里の家が大会で交差点の全てに信号を配置しないと気が済まないような神経質な町にあつたら、俺はそのほとんどを無

視してアクセルを踏みっぱなしにしていたことだろう。

自分から探せって言いたいのだろうか？ ホント女つてのは博哉の言うとおり、答えに一直線じゃないと気が済まないんだから。

「やる気あるよ。でもどうしていいかわかんないだけでさ。だって合コン三昧ってわけにもいかないだろ？」素直な発言だったが、美里はなぜか腹を抱えて笑い出した。「おいおい何だよ、真面目な話だろ？」

「ごめんごめん、真顔でそんなこと言うとは思わなくて。相変わらず想像力に欠けてるのね」

うつさい。ていうか相変わらずって何だ？ 心当たりないけど…

「いいわ、やる気あるなら。私作戦を思いついたの。当然オレックスにも手伝ってもらうけどね、やる気あるならいいでしょう？」
まったく女の発想つてのは自由だよな。内容も言わず男に答えさせるなんてよ。

どうせ聞いても答ええてくれないだろうと踏んで、俺は何も質問せず「たりめーだ、何でもこい」と答えた。俺に出来るのは強がることぐらいだ。

「オツケー、じゃあまたその時に声かけるわね」

ほらね、真相は闇の中だ。しかし俺は彼女がいつもの快活さを取り戻してくれたことにひとまず安堵していた。俺は閉めきつてた窓を少し開け、外のまだ冷たさの残る空気を入れた。正直俺はこのやりとりで体温が五度くらい上がったと思う。心拍数だって増えてる。

七月の少しだけ冷たい空気が額の汗をひんやりとさせ、頭がようやく冷静さを取り戻した。ふと隣を見ると、美里のまだあどけない顔が、通り抜けていく街灯に代わる代わる照らされて、少し大人びて見えた。その表情は憂いを帯びているようでもあったが、俺は気付かないふりをして視界を前方に戻した。彼女の家まであと五分ほど、無言の俺たちはお互い正面に見える月のぼんやりとした光の輪

郭を眺めていたんだと思う。俺たちの視線はその後美里が車を降りる時まで交わらなかった。

第七話「夏の鼻水」(前書き)

更新遅れました、すみません。

第七話「夏の鼻水」

その女はとにかく変わった女だった。俺が会った中でも指折りの変わった女だ。まあ俺に関わる女で変わってない奴はそんなに多くないんだが。

俺と会っている間彼女はとにかくずっと鼻をすすっていた。時々ポケットティッシュを取り出して鼻をかむのだが（それも男勝りな凄まじい音で）、ノアの洪水のように彼女の鼻はすぐにまた鼻水によって満たされてしまうようだった。

「風邪なの？」話も弾まないのどうとう俺はこの質問をしてしまった。何しろ人見知りなんだ、この娘は。まともに目をあわせてなんかくれないし、名前だって結局聞き取れないままだった（三、四回は聞き直したんだけど）。どうして美里がこの娘を紹介してくれたのか、全くもって理解不能だ。美里は昨日になって突然俺のケータイにこんなメールを寄越してきた。

From 稲森美里

Sub : Re

お疲れ〜明日暇かねえ？

ちよつと紹介したい娘がいるんだけど、

バイトとかない？ 空いてるなら三時に

いつものドトに来てちょ

三時ってというのがどういう時間設定なのかよく分からないが、なんとなく有無をいわせないこの文章に圧倒されて、二つ返事をしてしまった弱い俺。翌日、約束通りの時間に来たものの美里はいつこ

うに姿を見せる気配が無い。きよろきよろと挙動不審になってきたところに見知らぬ女が声をけてきた。

「…の…ですか？」ずるるっ。

しかしこれは声をかけたと言えるのだろうか。俺は話しかけられていると認識するまで五億光年くらいかかったと思う（つまりそれだけ遠くから声をかけられたかと思っただけ）。振り向いてみるとやけに小柄な赤い縁の眼鏡をかけた（地味な）女の子が俺の前でうつむいていた。かくかくしかじかのやりとりの末に、彼女が美里の”紹介したい娘”だと分かったときには三時も半分くらい終わっていた。ずるるっ。

彼女は（未だに名前は分からない）幼めな顔立ちが印象的で、眼鏡に負けないくらい鼻と頬が真っ赤なことを除けば可愛い部類に入ると思う。

化粧っ気は全くなく、素朴な田舎娘という表現がドンピシャな感じだ。服装も例外ではなく、七分のデニムに白い無地のカットソーというユニクロルックだ。きっとここに来るまでは麦わら帽子をかぶっていたに違いない。なにせそのまま稲刈りでもできそうな佇まいだ。左手には美大生が持っというようなスケッチブックを抱えている。彼女が持つとそれはより大きく見えた。

「ところで…」俺はいい加減話題を探すのにも飽きたので改めて切り出した。

「俺達は何で出会ったのかな？」やれやれ、こんな感傷的なセリフを言うつもりはなかったんだよ、マジで。おかげで彼女はキョトンとしたつきり何も話さない。このまま泣き出しちゃうんじゃないかと心配なくらい不思議に潤んだ目をしている。この喫茶店にいる誰も俺を

冷たい目で見ているような気がしてきた。女の子を泣かせてしまった時の罪悪感だ（実際には泣いてなんかいないのだが）。彼女の瞳にはこの世に存在するのも信じられないほど純粋な何かが宿ってい

た。それが今や獣に汚されたように歪んでいるのだ。そうではなくてもこの暑いぐらいの季節に鼻をすすりっぱなしなもんだから、余計泣いているように見えるわな…。

このタイミングで美里が来なかったら、俺は実刑判決が出ても異議申し立てしなかったんじゃないかなろうか…まあとにかく悪びれた様子もなく美里が現れ、俺はたっぷり用意していた怨み言も忘れて席を立った。

「おま…、マジおせえよ！」

「ゴメンゴメン、ちよつと立て込んだじゃってね」曖昧な言い訳が追及をやりわりと拒絶している。俺は諦めて話題を変えた。

「で、彼女は？」

前髪をいじっていた美里の指が止まる。

「あなたたち、まさか自己紹介もしてないの？」事態を察した美里は笑いながら呆れた口調で言った。遅れて来といて…と俺が言いかけた時、ようやく彼女が口を開いた。

「ミサト、違うの。私説明してない」ずるずるっ。

彼女のイントネーションは俺達のそれと少し違った。それで俺はようやく事態を把握し始めた。彼女は日本人じゃないのだ。アジア系の留学生なのだろう。しかしこんなにシャイで留学なんてものが務まるもんなのか？素朴な疑問は俺の頭をさらに混乱させた。

「全く、リンメイは人見知りするんだからアンタがちゃんとリードしてあげなきゃ駄目でしょ」

おいおい、人見知りには限度つてもんがあるだろ…。

「ホラ、自己紹介しなさい」俺は（しぶしぶ）名前を告げた。

「私、リンメイいます。よろしくおねがいします」美里が来てだいぶリラックスしたようだ。彼女は少し低めだが優しい声の持ち主だった。俺は女性の低い声にはうるさい方だが、リンメイの声は俺が聞いた中でも三本の指に入る。鼻声も彼女の声の魅力を更に引き立てているようだ。美里のキンキンした声なんかより数百倍

いい。

「何か言った？」美里が鋭く睨み、俺は慌てて首を降った。やれやれ、こいつの無駄な鋭さも俺の好むところではない。

「ま、とにかくリンメイに任せとけば大丈夫よ！早速始めましょう」
まるでリンメイが魔法使いか何かみたいな口調で美里は言った。
リンメイは慌てて席を立ち、美里の後ろ姿を追う。俺はトレーと一緒に取り残されているわけにもいかず、飲みかけのカフェオレを一気に飲み干した。ストローを通り抜ける音がリンメイの鼻をすすする音に似ていなくも無いな、と俺は思った。

第八話「オレックスと図書館」(前書き)

更新遅くなりました。

加筆修正を繰り返しながらも少しずつ書いていきたいと思っています。
コメントなんかいただけたらほんとにほんとに嬉しいです。
よろしくお願いします。

第八話「オレックスと図書館」

俺は大学の前期試験を二週間後に控えた図書館つてのがめっぼう苦手だ。だからテスト期間外に限り、ということだけれど、講義に空きがあると俺は必ず図書館に行った。

テスト期間外の図書館は適度な静けさがあり、外とは異なる時間軸で緩やかに時が流れる。

俺は読書しながら（時々本を開いたままぼーっとしながら）、肉体という外部との境界線がフェードアウトし、意識が広く自分の中にゆつくりと沈み込む感覚を味わう。こういう感覚を楽しむには図書館が最適なのを俺は経験から学んだ。時々向かいの机に座っている大学院生が本をめくる音が聞こえ、もうすぐ三十代を迎える大学職員員の足音が聞こえ（彼女は俺の「理想の姉」像にすこぶる近い）、定刻を告げるチャイムが慎ましげに流れる。適度な音が俺と世界の境界線をぼんやりと浮かび上がらせ、俺はゆりかごに揺られる赤子のように、自分を取り戻したり溶け込みましたりを繰り返している。寝ているわけではないが（まあ寝てしまうことも時にはある）、電車でうたた寝している感覚に近いのかも知れない。

これが自宅アパートとなると話は変わる。

電気を消しカーテンを閉め、ステレオの電源も切って完全な沈黙と暗闇の中に沈み込むと、そこに待つのは完全な孤独だ。もう帰れないのではと思うくらい深くなったりとした闇に体を奪われ、音も光も熱もない場所で、死に向かって強くゆつくりと突き進んでいく。待てよ、俺はどこにも行きたくないんだよ。辿り着くことを望んでるわけじゃないんだよ。

気が付くと俺は部屋に戻っている。さっきまで暗闇だったベッド

や机やカバンなんかが、素知らぬ顔でそこに存在している。さつきまでもそこに居ましたけど、とても言いたげに。

とにかくそんなわけで、俺は試験期間の図書からは何も得られないし、自ら進んで行こうとも思わないのだが、俺に先行する二人の女性はそんなことお構い無しに奥へ奥へと突き進んで行った。

俺達が通う大学は公立のぱっとしない大学で、学力もやはりぱっとしない（なのに何故博哉は浪人したのだろうか？）。褒められもせずバカにもされず、他人が聞くと一番リアクションに困るタイプの大学。もちろん世の中のほとんどの大学がこのカテゴリーに属するのだが。

そんなうちの大学が古さの他に誇っているのが、他でもないこの中央図書館だった。大きさは地下二階地上五階、広さも野球のグラウンドくらいはあるだろう。蔵書の数も古いだけあって豊富で、しかも綺麗に手入れが行き届いている。

しかしなんとと言ってもこの図書館の一番のウリは、その建物そのものと言って差し支えないだろう。

明治初期を思わせる（実際には昭和初期の建造物だが）くすんだ赤いレンガ造りで、その体を半分裏の小さなお椀山に埋めるように佇んでいる。

周りは溢れんばかりの広葉樹が青々と繁っていて、太陽の光が人々の生気を奪っているのとは対照的に、溢れんばかりの生命力を空に向けて放っているようだ。

古びた洋館はそんな緑の僅かな隙間から褐色の肌をキラキラと輝くように見せている。木漏れ日が生み出すコントラストも見事としか言いようがない。それが四季によって見せる表情を変えるのだから、その外観のためだけにこの大学を訪れる人がいるのも納得できる。俺は建築には疎いが、ここが特別美しい場所だというのは一目見て分かった。絶対的な真実は理解に容易いのだ。

話は戻るが、それにしても不可解なのが目の前の二人だ。

「何ぼーっとしてんのよ」美里がバカにしたような低い声で言った。

「してねえよ。てかここグループ学習室だろ？倍率高いのによくとれたな」グループ学習室は予約制の個室だ。当然、試験期間中はこの大学に入るより高い倍率の抽選になる。

「この後使う予定があるのよ。四時半からの予約だったんだけど、前の人達が四時に終わるみたいだから三十分延ばしといたのよ。備えあれば憂いなしとはこのことね」

「あの一、何やるか全く聞いてないんですけど」自画自賛に冷たくツツコンでみる。

「アンタの恋のお手伝いに決まってるじゃない」

美里はまたも冷ややかにさらっと言いつつ。意外すぎる答えに俺も面食らう。

「何だと思っただのよ？」

「てつきりテス勉かと…俺のチャイ語見てくれるんじゃないの？」俺のささやかなジョークは美里に通用するどころか更なる怒りを買ったようだ。しかし冗談抜きで前期の「中国語三」はやバかった。

「リンメイは似顔絵がすごく上手なの。しかも模写するだけじゃなくて、聞いた特徴から描くこともできるのよ」

「指名手配の似顔絵みたいなの？」

「そうそう。で、アンタ例の彼女の記憶はあるんでしょ？それをリンメイに描き起こしてもらって、アンタの記憶の彼女ってやつを探すのよ。いいアイデアだと思わない？」

ツツコミ所はたくさんあるのだが、美里の真剣さとその力説っぷりにオレックスは閉口してしまった。

「でもよ、似顔絵だけでどうやって探すんだよ？まさか貼り紙と

かして大々的に人探しするわけじゃないだろ？それに下手すりゃただのストーカーだぜ？」

「そこらへんはちゃんと考えてあるわよ。まあ美里様に任せなさいって。何の考えもなしで気まぐれに声かけたわけじゃないんだからさ」

よくよく考えればそれもそうだな、と思いながら俺は一息ついた。こいつは走り出したら止まらない女なんだ。だが無計画であったことは無い。

「さ、時間も無いし、顔の特徴を思い出してリンメイに伝えて」

俺はゆっくりと目を閉じた。

瞼の裏には刺すような夏の日差しがまだ焼き付いている。そこに記憶でしか会ったことのない彼女の顔を描いてみる。

しかしなかなかうまくいかない。

不完全な闇、不完全な沈黙が俺の意識に干渉してくる。

俺は迷う。もしかしたら、俺は彼女を思い出すべきではないのではないか？深い闇の中に閉じ込めたまま、思い出さなければいい。俺は想像した。彼女が俺の中で永遠の囚人となり、やがて忘れ去られて孤独に苦しんでいる姿を。格子の隙間から必死に手を伸ばし、俺の名前を叫び続けている姿を。そうだ、彼女は俺を呼んでいる。俺を求めている。待つてろ、今迎えに行く。

スッと何かが落ちたのを感じた。夜が訪れた瞬間のように。そして瞼の裏に記憶の彼女が姿を現した。

第九話「伝説のリフ」（前書き）

長らくほったらかしでしたが、また書きたい気分になったので、ス
マホからちまちま書きます。

第九話「伝説のリフ」

「で、それがお前の記憶の彼女ってわけね」

大した感動もなく、声のでかさが取り柄のベースストは言った。胡坐をかいて座りながら適当なフレーズを弾いている。いつか伝説に残るリフを思いついてみせる、というのがこいつの口癖だ。かく言う俺も同じ体勢でギターを抱えて適当に弾いている。適当なはずなのにどっかで聞いたことあるフレーズしか出来ないから音楽って不思議だ。

「なんだ、全然驚いてねーんだな」

俺は不満げに言った。いや、本当に不満だったのだ。

図書館に連行された後、俺はリンメイに「記憶の彼女」の特徴を事細かに伝えた。始めは細部を思い出すのに相当苦勞し、彼女に上手くイメージを伝えられず、思ったような顔が出来上がらなかったのだが、俺がその要領を得てからは早かった。そして美里の言ったことは決して誇張でもなんでもなく、リンメイは本当に俺の頭の中にしか存在できなかったイメージを、スケッチブックの上に描写していった。リンメイは始め会ったときの虚ろな眼差しから一転して終始研ぎ澄まされた鋭い目つきをしていた。鼻水もいつの間にか止まっていた。

やがて三十分足らずで絵は完成した。それは似ているなんてものではなく、まさに彼女そのものだった。俺ですら表現できなかった部分をリンメイは描き出していた。この娘は俺の頭の中を覗き見て絵を描いたんじゃないかと思うくらいだ。そのせいで俺はいささか興奮してしまった。始めは期待も何もしてなかったのだが（そもそも今日こんなことが行われるということすら知らなかったのだ）、これなら見つかるんじゃないか、と真剣に期待してその場は別れた

のだ。

なのにこの冷やかな態度。こんなとこだけベーシスト気取りかよ。

「前言ったかもしれねーけどさ」

ため息混じりに博哉が言った。左手はまだネックの上を滑っている。

「別にお前は特別じゃねーよ。ただ変わってるだけだ。よく考えるよ、顔が分かったってお前はまだ恋愛のスタートラインにだって立ってないんだぜ。何せ出会ってすらいないんだからな」

いちいちごもつともだ。こういう時だけやけに年上っぽい。

「だいたい顔分かったって、それでどうやって探すんだよ？見つけどどうすんだよ？」

「それは美里にいい案が……」

そこまで言って俺は我に返った。博哉はまた一つため息をつく。

「何だよ」溜め息にちよつとイラついた反応をしてしまう。

「何だよじゃねえよ、ツッコミどころ満載で何から言えばいいかわかんねえんだよ」博哉の手が止まった。無音の部屋の空気が重苦しく二人にのしかかる。

俺のこの後の不幸は、満載されたツッコミどころについて、何一つとして気付いていない点に端を発していた。そう、俺は博哉のこのセリフに反論するどころか、少し首を傾げただけで深く考えもしなかったのだ。今までがそうであったように、俺の人生を動かしているのは成り行きと言われるような曖昧なものだったのだ。

やがて俺達は再び「最高のリフ」を当てもなく探し始めた。その間俺達は無言だった。別に気まずい雰囲気だった訳じゃない、いつもこんなんだ。

博哉の吸った煙草の残骸が崩壊したストーンヘンジを形成し、周りをビールの空き缶が高層ビルのようにそびえ立っている。だいたいの小腹が空いたと思い始める時分、どっちかが飽きてギターの代わりに寝息をたて始める。残された方はなぜか後を追って眠りたいのに眠れず、青みを帯びはじめた初夏の空に叶うはずもない救いの眼差しを向ける。今日は俺がその番みたいだ。

俺達は薄々気付いていた。適当にポロポロ弾いていて偶然生まれただけの「最高のリフ」なんて存在しないんだって。最高と思えるものではなく、神様が思いつきで与えてくれるような甘ったるいものではない。想像もつかないほどの努力と犠牲の繰り返しによって生まれたものなんだ。そう、そこに「成り行き」なんてものはあり得ない。だが俺たちは、純粋に楽しい「今」を犠牲にしてまで理想を追い求める覚悟ができないでいた。きつと器用過ぎたのだ。それなりの努力でそれなりの成果を得る生き方に慣れてしまっていたのだ。そんな生き方を否定できずにここまでできてしまったんだ。

隣のベーシストは難しい顔をして静かな寝息をたてていた。まるで俺だけが、世界中の苦悩を背負っているみたいだな、とオレックスは思った。沼は俺の心が沈み込んでくるのを待っている。そして俺がもがき苦しむほどに、暗い闇の奥底へと引きずり込む……この闇なら何かを手に入れられるのだろうか？

オレックスはこのフレーズにメロディを付けてみた。それはやはりどこかで聞いた詩だった。この程度の苦悩は、先人がとづくに体

験して詩になっているんだ、と思うと少し気が楽になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2871f/>

彼女（の記憶）に恋をする

2010年11月23日01時48分発行